2026年5月3日（日）復活節主日礼拝説教

「何もとれない漁」井上隆晶牧師　　ヨハネによる福音書21章1～14節

❶【何も取れない漁とは】

ヨハネ福音書は20章で終わっており、最後に「本書の目的」が書かれています。そこで21章は後で追加された部分だということが分かります。古い写本にはほとんどこの21章がついているので、かなり早い時期にこの部分が追加されたことが分かっています。追加された目的は、また来週にお話ししたいと思います。
今日の物語を読んでみましょう。弟子たちはエルサレムから故郷のガリラヤへ帰ってきました。ペトロと六人の弟子たちは舟に乗り込み漁に出かけましたが、その夜は何も捕れませんでした。何も捕れない漁には、象徴的な意味があります。以前ペトロは、このガリラヤ湖で何も捕れない漁を経験し、その後イエスから「**私について来なさい。人間を取る漁師にしよう**」（マルコ1：18）といわれ、弟子となりました。人を取る漁師というのは宣教者のことです。ですから「何も捕れない漁」とは、信じる人が起こらないことを意味しています。

❷【人間の魂を救うには、上からの力がどうしても必要であること】

夜が明けたころ、イエス様は岸に立っていましたが弟子たちはイエス様だとは分りませんでした。彼らは湖ばかりを見ていて、上を見上げていなかったからです。しかし弟子たちが主を見ていなくても、主は彼等を見ておられました。イエス様は彼らに声をかけます。「**子たちよ、何か食べるものはあるか。**」弟子たちは答えます。「**ありません**」イエス様はいいます。「**舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば取れるはずだ。**」（5～6節）彼らが網を打ってみると、魚があまりにも多くて、網を引き揚げることができないほどでした。網を陸に引き上げると153匹もの大きな魚でいっぱいでした。４世紀のヒエロニムスは、これは地中海の全ての魚の種類であり、あらゆる人が救われるという意味だと解釈しました。それほどの魚が取れたのに「**網が破れなかった**」のは、どんな人でも受け入れ、何があっても破れない教会を現しています。ある学者は「舟の右側とは異邦人を意味する」とも解釈しました。
ヨハネの福音書とルカの福音書に書かれている「何も取れない漁」の違いは何でしょう。ルカの方はイエス様が舟に乗っており、ヨハネの方は陸におられたということです。**舟の中にいるイエス様は復活前の姿であり、陸にいるイエス様は復活後の姿でしょう。舟は教会を現しており、湖は不安定なこの世を象徴し、陸は神の国を象徴しています。しかし、どちらにしてもキリストの言葉に聞かなければ収穫を得ることは出来なかったということです。**救われる人が起きて来ないのは、人間が自分の力や知識や経験に頼って伝道していたからです。自分の力でやろうとする人は、キリストに頼りません。**人の力が尽き、自分の無力さを知るまで一晩中でもキリストはじっと見ておられます。人間の魂を救うためには、人間**

の善意や努力では駄目で、どうしても上からの力が必要なのです。信仰者が生まれるのは神の業だからです。「**神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。**」（ヨハネ 6：29）と書かれています。だからどんな時も、キリストに頼り、キリストに聞く習慣を身に着けるべきです。

●チト・コリャンデルはこう書いています。「**教父たちは異句同音に言う。まず、どんなことがあっても、自分の力に頼ってはならないと。これから始めようとする闘いはとても難しいので、人間の力だけではとても闘い抜けない。自分の力に頼るなら、あなたはすぐに倒されて、闘いを続ける意志さえも失う。**」

●ヒエロニムスはこう書いています。「**私たちは聖餐の神秘においてキリストの肉を食べ、キリストの血を飲むが、聖書朗読においてもやはりキリストの肉を食べ、キリストの血を飲むのである。私にとって福音書はキリストの体であると思う。**」

私たちは、どんな時も聖書を読み、祈るという「聖なる生活」を抜きにして何も始まらないのだ、ということを知るべきです。私たちは自分の人生の中に神を入れなければならず、キリストという土台の上に人生を築かなければならないのです。

❸【主を知るために信仰生活がある】

弟子たちが「**陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。**」(9 節) とあります。既に陸にはパンも焼いた魚も用意してありました。では何のために苦労して漁をさせたのでしょう。私たちは何のために伝道をするのでしょう。信徒を増やす為でしょうか。聖書は「**永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。**」(使徒 13：48) と書かれていて、信じる人は定められているようなのです。**私たちが伝道する目的は、神様が本当に生きておられることを知り、神様の業を体験する為なのです。それをひと言でいうなら「神を知るため」です。**旧約聖書の中に繰り返し出てくる言葉に「**～をして栄光を現わす時、あなたがたは私が主であることを知るようになる。**」というものがあります。「**主を知る**」ために、すべての地上での信仰生活があるのです。会堂建築もそうです。この世に永遠に建物を残すためではありません。建物が狭く不便だからでもありません。会堂建築を通して「神様が生きておられることを知る為」なのです。だからここでも弟子たちは「**主であることを知っていたからである**」（ヨハネ 21：12）と書かれているんです。**教会が大きかろうと小さかろうと、「主の業」が現れなければ意味がないのです。**

❹【キリストと共に朝食を取る＝神の国の先取り】

イエス様は「**さあ、来て、朝の食事をしなさい**」(12 節) と言われ、パンと魚を取って弟子たちに与えられました。詩編 23 篇 5 節「**あなたはわたしに食卓を整えてくださる。**」を思い出します。**この岸辺での食事は、天国での食卓を連想させま**

す。そして、教会での聖餐式を連想させます。面白いことに、聖書は善悪知識の木の実を食べる物語で始まり、イエス様の手からいただくパンを食べる物語で終わっています。聖書は一貫して「食べる話」で貫かれています。

●教会は天の国という氷山の一角、または天の国の岸辺です。なぜ岸辺なのでしょうか？それは天ともつながり、この世という海ともつながっているからです。都島教会はその最も小さい部分にしか過ぎません。都島教会の後ろには、永遠の神の御国が存在しています。時間を超え、空間を超え、場所を超えた教会が、今この世の中に、天国の窓として出張しているです。この教会はどこよりも小さく、この世の人は目もくれません。小さな門であり、狭い道です。この世は強大であり、建物はどれもみな立派で大きく、永遠に残るように人々は思っていますが、時が来たならばすべての飾りは剥がれ落ち、この世のものはみな崩れ去るでしょう。そして隠れていた巨大な神の国が現れるのです。「**神は、すべてをその（御子）足の下に服従させた**」（Ｉコリント 15：27）からです。万物はキリストに服従します。その時、彼の体である教会も高く上げられるでしょう。そして人々は知ります。この誰もが見向きもしなかったちっぽけな都島教会が、永遠に続く神の王国の門であったということを。どんなに小さかろうと、教会はキリストの聖なる神秘体です。そこに聖霊は充満し、キリストはそこに現れ、人と交わり、神の命を与えます。その昔、モーセは自分が立っている場所が、神がおられる場所であることを知りませんでした。どこにでもある荒れ果てた場所だと思っていました。しかし神はモーセに言われました。「**足から履物を脱ぎなさい。あなたが立っている場所は聖なる土地だから。**」（出エジプト３：５）同じ事が、世の終わりにも再現されるでしょう。この都島教会はキリストの聖なる体、主の足台です。その時、人々は言うでしょう。「ああ、なぜもっとこの場所に頻繁に足を運ばなかったのだろう。ああ、なぜもっとこの場所で永遠の言葉を聞き、真の食べ物である聖餐をいただかなかったのだろう。ああ、なぜ私は永遠に残るものの為に生命と時間を遣わなかったのだろう。」

教会に来る人は誰でも、天国の岸にすでに立っているのです。大事なことは復活したキリストと同じ岸に立っているということです。復活したキリストと共に食事をしているということです。既にあなたは新しい世界に立ち、生きているのです。それが私に勇気を与えてくれます。この方がなさったことだけが永遠に残りますように。私たち人間の業は消えますように。すべての舌がキリストを賛美し、褒め讃えますように。私たちは永遠の岸を見て、ひたすら神の国を伝えてゆきたいと思います。